

JISS

The Japan Institute of
Scandinavian Studies

No. 316
2000/7

発行所 社団法人スウェーデン社会研究所 〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1 (株) 科学新聞社内5階 TEL03 (5776) 1835 / FAX03 (5776) 1836
発行人 松元さざり Publisher&Editor Sagiri Matsumoto 編集責任者 川崎一彦 Editor in Chief Kazuhiko Kawasaki
デザイン ワンバイワンステーション 印刷所 東友印刷 2000年7月25日発行 No. 316



Photo 中嶋千絵 (dml.com)

JISS特別講演会 レクチャーシリーズ Vol.1 「ハビリテーリングの先駆者たちから学ぶ! ～スウェーデン医療チームの現場から～」 / ツェンベリー 来日200年
祭の思い出 / スウェーデンと私 / 17世紀の戦艦ヴァーサ号模型贈呈式を見て / 法人会員情報 / 「ロッタちゃんと赤いじてんしゃ」の主演女優グレテ・ハヴネ
ショルドちゃん来日! / BOOK / インフォメーション

ハビリテーリングの先駆者たちから学ぶ!

～スウェーデン医療チームの現場から～

平成12年6月6日(火)に、スウェーデン大使館オーデイトリウムに於いて、大使館でのレクチャーシリーズ第1回目が開催された。スウェーデン南部スコネ地方のハビリテーリングセンター総院長・マルガレータ・ニルソン氏と作業療法士・河本佳子氏をお招きして、スウェーデンのハビリテーリングの歴史や現状などについてお話し頂いた。当日は、JISS(当研究所英語略名)会長、また、今回の講演会開催にあたり多大な協力を頂いた、スウェーデン大使館広報部報道参事官のカイ・レイニウス氏からもお言葉を頂きスタートした。会場には、医療現場で勤務されている医師の方、福祉を学んでいる学生、障害を持っている方、そして福祉問題に興味のある沢山の方々にご参加頂き、実りある時間になったと確信している。



講演に先立ち挨拶をする当研究所会長と、講演会開催において多大な協力を頂いたスウェーデン大使館広報部報道参事官カイ・レイニウス氏

From Participant

1963年、福祉の誉れ高いスウェーデンを初めて訪れた頃は、当時極めて貧しかった日本と比べ、GNPといふ経済基盤が一桁違うこともあり、むしろその差を当然としてみていた記憶がある。

わが国はその後経済的發展をとげ、表面上の経済規模は他の多くの国々に比して決しておとらない状態となった。また、リハビリテーションについては40年前、その言葉すら一般的には知られていなかったところと様変わりとはなっている。にもかかわらず今回示された分野でのギャップは未だに大きい。

講演で小児に関連してISP、障害児とその家族への個別対応の説明がなされた。主として、いわば作業療法的立場からであったともいえようが、国情の差を含めてわが国では同様のサービスの普及は未だになじんでいない実態といえよう。

ハビリテーリングにつき部分的に、全く個別には本邦でも対応可能であり、実例もある。筆者の身近にも筋ジストロフィーで、就学時に関係者を説得し、一般校に通学させ、専門学校卒業後コンピューター関連の会社に就職し、自立歩行は不可能ながら自分の自動車運転で通



講師のマルガレータ・ニルソン氏と河本佳子氏

勤するまでの十数年間のフォロー、頸髄損傷で四肢麻痺、両手足ともに実用的運動能力は失いながら定年までの就業を含めて数十年間を全うした例などがある。ただし本邦でのこれらはいくまでも個別の対応であり一般的ではない。

また、リハビリテーションの技術的水準については他にも米国その他に高いレベルがみられる。しかし、スウェーデンで地域について組織化された形のいわゆるISPの存在はこの分野にあって世界的にもまことに貴重なところといえよう。

日本の中で今考えるべきは、施政において国民生活上の安心感をどの様に提供するかである。ひとつには大きな因子として徴税についての考え方、処理の差もあろう。北欧では税率の高さはそれなりに受け入れられている。

介護保険が実施された現在、介護に対する「リハビリテーションの前置」についても更に浸透する必要がある。

医療チームの実例を講演で聞きながら、往時より将来に向けての想いを新たにすることが出来た望外の一夕であった。(東海大学名誉教授 村上恵一氏)

Individual Service Program (ISP) は、その名前の通り、障害児とその家族の個性を最も重要視した非常に实际的で具体的な対処方法であると感じた。そしてそのチームアプローチは職種間の垣根を取っ払ったところで行われているため、情報伝達につきもののお役所的なロスがなく、型にはまった階層構造もないように見受けられた。その反面、チームメンバー個々の裁量の広さと責務の大きさも感じられた。患児やその家族を中心にすえた「チーム」という概念は、日本のリハビリテーションの理念の中にも当然存在している。しかし日本の医療者は物理的にも心理的にも病院という囲いを出て行動することあまり積極的ではないし、そうさせない組織の縛りが多いことも否めない。その点スウェーデンでは、療育構造として教師や行政担当者も含めたチームにおいて、パー



(写真上) 100名収容可能なスウェーデン大使館オーディトリウムは満席となり、沢山の参加者と共に有意義な講演会となった
(写真左) OHPやスライドを豊富に用いての講演会

トナーシップを基盤にしたコミュニケーションが実践されていることは素直に素晴らしいと感じた。患児やその家族に対してハビリテーションセンターに対する不満を調査し、科学的に解析してISPのプログラムを開発していった過程は、患児がチームの主役であるという認識がよく浸透していることを推察させるものであった。

講演の中で「ブリース表という表意文字は世界共通である」という話がされた。しかし少なくとも私の周囲では知っている人が皆無であった。恥ずべき事なのかどうか？ブリース表が世界共通というよりも、年齢や人種、文化に影響されず覚えやすいコミュニケーション手段というものなのだろうと理解した。私の印象に残ったハビリテーションの実例の一つは、ブリース表の便利さではなく、それを媒体として使い、障害児がコミュニケーションする環境を構築し、更に障害児と健常児にそれを共通言語として持たせることで障害児がリーダーシップをとれるチャンスを与えたことであった。こういうシチュエーションなら日本でも現実的になるぞ、と感じた。

ISPが実践できているのはスウェーデンの法的、経済(税制)的基盤があるからには違いないし、日本の行政のなかでは現実的な施策とは言えないのが実感だ。しかしスウェーデン文化が「障害児・者の人権確立と社会参加」を障害者との対話の中で育んでいることの素地となっているのならば、我々はISPを知る前にもっと文化をしるべきだろうと感じた。(リハビリテーション科医師 日原信彦氏)

講演内容は、

- ①スウェーデン南部マルメ地方の福祉とその歴史
- ②ISP(個人サービスプログラム)法の紹介
- ③スウェーデンハビリテーションセンター医療チームの

発展と質疑応答に大別されよう。

①を聞いて、私なりに日本と比較すると、“福祉国家スウェーデン”と言われるように日本とは国状も国勢も、自然条件も国際環境も、人種も歴史も、その他もろもろの点であまりに違いすぎる。敗戦より、経済復興を目標に国際環境を生き抜いてきた日本と、福祉国家を目標に長年発展してきた国とは、人間一人一人に対する権利、保障という観点から国際性、社会的保障という面で歴然とした違いがあることが理解できた。その1つの例として、講演の中で、日本からハビリテーションセンターへ視察団が訪問したとき、センター内にて重症と考えられる小児患者が存在しないことに驚き、視察団のメンバーより“本当の現状を見せて下さい”という依頼があり、ハビリテーションセンターの職員より、センター内には日本で考えられるような重症患者は実際に存在しないことを知らされた、という事であった。

②のISP法とは、ハンディーを持つ子供やその家族を中心に学校の先生、ヘルパー、建築士、裁縫士、理学療法士、作業療法士など、多人数によるチームを作り、それぞれ専門家として重要な問題点に関して対策を見つけ出すサービスプログラムのことをいう。

このプログラムは、日本で今年4月より導入されている介護保険法によく似ているもので、コンダクトパーソンといわれるものが介護保険法のケアマネージャーに類似しており、ケアの中心となってプログラムを遂行する役目になっている。

③スウェーデンハビリテーションセンターの医療チームの発展についての講話では、ハビリテーションは全て公立で組織されており、障害者に対して公平に医療を受けられるシステムになっていること。また学校や公共機関と連携し障害者を受け入れる準備をしていること。つまりバリアフリーに向けた社会環境整備や、教育面にも障害を持たない子供たちから、障害者を隔離することではなく、同時に同じ場所で教育を受けることにより、精神的にも障害者を受け入れる教育への体勢が築き上げられている。

今回、介護保険制度導入に当たり、スウェーデンと日本では、環境、教育、国勢、その他いろいろな点においてあまりにも違いすぎる印象である。スウェーデンでは、いわば道のあるところに、車を走らせるが如くISP法を導入することができたが、日本においては、道が狭いにもかかわらず、制度だけが先行し、車を走らせ、環境が



展示ホールでのコーヒープレイクは、参加者の情報交換の場でもあった

整わないうちから無理矢理介護保険法という車を走らせたという現状だと思われる。とにもかくにも、日本も少しずつ福祉に向けて動き始めたのではなからうか。(横浜リハビリテーション専門学校 石黒圭広氏)

スウェーデンのリハビリテーションでは、障害児が、補装具や、機器を乳児のころから使うことができ、食事や、排泄などの日常生活のためだけでなく、遊びができるような生活を楽しむための補装具も充実しています。これらの補装具は、リハビリテーションセンター内の技術者や、裁縫士などが、作業療法士と協力し、一人一人に合った補装具を提供することができます。このように、個人にあった補装具や、訓練を乳児のころから受けられるので、スウェーデンの障害児たちは重度な障害を持ったとしても寝たきりを予防できるのです。

環境面では、自宅の環境を整えるだけでなく、学校に入学するには学校内をバリアフリーにして環境面を整えるので、健康な子供たちと一緒に学校に通うことができます。

今回私は、スウェーデンの作業療法について講演を聞いて、非常に驚きました。日本では、これから障害児を特別学級ではなく、普通学級に入れようという動きが始まったばかりで、授業でその話を聞いたときに理想の話だと感じていました。その理想がスウェーデンでは当然のように行われており、障害を持った子供たちが生活を楽しむことができるようにチームを組んで取り組んでいます。日本ではまだ、障害者が生活を楽しむには多くの問題があり、そこまで対象者のニーズにこたえることはできないことが多いと感じます。

しかし、今回聞いたスウェーデンのリハビリテーションは理想の話ではなく、現実に行っていかなければならないと思いました。日本とスウェーデンは文化や習慣、制度が違います。このリハビリテーションをそのまま取り入れるのではなく、障害を持った人たちが「生活を楽しむ」ができるように、作業療法士は日本の特徴や良い部分を活かして、他の職種とも連携を取りながら活動してい



講演会終了後も参加者の質問に答える講師のお2人

なければと思いました。

また、講演会や学会に多く参加して海外や作業療法に関する情報を多く集めて作業療法に対する知識を深める必要があると思いました。河本氏が講演会の中で「作業療法士は、対象者の残っている可能性を活かして、対象者と楽しむ事ができます」とおっしゃったことがとても印象的で、作業療法士の在り方を改めて教わった気がしています。

この講演会で私は、多くの事を学ぶことができました。この学んだことをこれからの勉強に活かし、一緒に楽しめる作業療法士を目指して努力していきたいです。(横浜リハビリテーション専門学校 望永和美氏)

私はスウェーデンに引きつけられ3度も行くことが出来ました。その度に生きるエネルギーみたいなものを持ち帰り、現在の生活につながっていると確信しています。今回の講演を聴いていて旅した時には分からなかったことがよく分かり、やはり人の価値観の違いを痛切に感じました。まだまだ日本は(私も含めて)遅れているのだと思います…。(田中美千代氏)

講演会の内容が網羅されたブックレット(800円/送料込)を作成しました。ご希望の方は、事務局までお問い合わせ下さい。

A Memory Concerning Bicentenary Celebration of C.P.Thunberg's Visit to Japan

ツェンベリー来日200年祭の思い出

日本大学名誉教授 高須 裕三

Professor Emeritus of Nihon University YUZO TAKASU

スウェーデン社会研究所33年の歴史の中で、私が常務理事を勤めたのは、創設より約10年までの間でありました。その中で最も感銘深く思い出される局面の一つについて記します。

今から224年の昔、1776年、わが国当時の鎖国政策の下、長崎・出島に居住を限られていたオランダ商館所属の医師(植物学者)ツェンベリーが、日本各地の植物採集の志を抱いて、宿願の日本列島東上旅行の好機を掴んで、箱根の関を越え、江戸城に参上して、5月18日、十代将軍家

治に謁見を賜り、西洋の医学や科学技術の一端を披露し、そのあと江戸に待機中の桂川甫周その他の蘭学者たちに、本格的に西洋の医学・科学を伝授し、手術器具一式を残して、やがて日本を去っていった歴史的な大廻転の舞台に、日瑞文化交流の原点は求められるのであろう。

しかも日本の植物学者たちは、当時すでに「本草学」として適格な植物標本などを整備しており、ツェンベリーの分類学上の要請に応えうような日本産の植物標本のみやげを提供したのであった。

そのみでなく、ツェンペリーの帰国後も、俊才の桂川甫周などは、オランダ語による通信の仕事をおぼろげなく、その文化交流をば瞬発的なものに終らせぬ努力の跡を遺しているのがであった。

まさに当時すでに、一方的な知識の流入だけではなく、双互交流の実をあげた先人の栄ある歴史の道標が、ここにあったと讃えるのである。

ところで、ツェンペリーの長崎・出島への到着は1775年(安永5年)8月のなかばであったので、昭和50年(1975年)の頃になると、植物学史に関心のある学者の中には、ツェンペリー来日200年記念の着想がそれぞれに浮かんだとしても不思議ではない。

わが国の植物分類学の分野での第一人者の中に数えあげても異論のないであろう方として、昭和天皇の御名を想起できる。その学問の御相手役を長い間勤めてきた東大名譽教授の原寛博士の語る所によれば、陛下は、今年はこの年の年に当るが、日本の学界では何かの企画を考えているのか、という趣旨のお言葉があったそうである。原博士は、いずれ植物学会の然るべき人びとも相談してお答え申し上げべき旨を言上し、夏休みも過ぎた頃の機会を漠然と考えていたそうである。

さて「自然的呼応」というべきか、当時日本植物学会会長であった林孝三博士の記す所によれば(林孝三「私の研究履歴書—昭和植物学60年を歩む—」208ページ)、「昭和50年(1975年)10月1日の午前、スウェーデン大使館のフリッソン報道官が「スウェーデン社会研究所」の河野道夫氏とともに早大の大隈会館に来られ…フリッソン氏から『ツェンペリー来日200年の記念行事を明春5月18日の前後に開催したい』とて、日本植物学会の全面的協力を願はれたのであった。

林会長は、賛成の気持ちを言外に表はしつつも、折しも同日午後にかかれる日本植物学会の常任評議員会に諮った上での正式返事を約束して、フリッソンさんを送り出した。

以後、誰にも異議なくこの企画は進行し、11月14日には日瑞間の公式連絡会も開かれ、行事計画の大綱が出来

上がった。

その順調な協力を推進した原動力は、もとより、学祖リンネ〜ツェンペリーの抱いた植物学的理念と功績とにあったであろうが、のちのちフリッソン氏の語った所によれば、日本側代表としての、林孝三会長の高僧のような風貌と、温厚篤実な人柄と、多年蓄積の科学技術的学識とによるものであったとしても過言ではないであろうと。まったく私も同感である。

思うに植物学には、ことに植物分類学には、近代科学的合理主義の冷厳さに侵蝕されぬ一種の宗教的安心立命の境地が保守されているかの如くである。

昭和天皇は、側近がお庭の雑草を刈り取ると龍顔を曇らされ、この世に「雑草」などないのだ、と戒められたとのことである。

植物分類学以外では、人間の立てた賢しき原理に従って、評価・選別が行われる。しかるに分類学では、地球上に生きる全ての植物は、まさにその美醜・強弱の評価を超越して、おのおのその所を得、存在するものは存在のままに貴重なのである。

そこでは学問と宗教とは重層、融合するかの如くである。ここで、宗教というのは、もとより、偏狭独断の要素が強いいわゆる新興宗教の類をいうのではない。昔から祖先の生活文化の中に溶けこんでいる大自然の生命のエネルギーへの畏敬のごとき素朴でおおらかな情緒である。

スウェーデンの生活文化もこの大自然畏敬の自然宗教であり、日本の生活文化もこの大自然愛惜の自然宗教である。この両世界を結ぶ綱こそツェンペリーによって成し遂げられた植物分類学の道であったと思われる。



「江戸参府随行記」

C.P.ツェンペリー著 高橋 文訳

B6版/408頁/2,900円(税別)/平凡社

本書は、C.P.ツェンペリーの「1770年から1779年にわたるヨーロッパ、アフリカ、アジア旅行記」(1788—1793)の日本に関する部分を、スウェーデン語原著から翻訳したものである。

Sweden and My Life

スウェーデンと私

私はストックホルム日本人会の機関紙『ストックホルム』に寄稿する『目指すべき福祉社会とは』の3回目の原稿を書いていた。1996年に4年振りにストックホルム大学の日本学科を訪れて、リンドベック-和田先生(Prof. Lindbeck-Wada)と懇談した後にそのご主人和田氏(ストックホルム日本人会会長和田俊之氏)からのご依頼によるものである。これは日本語で原稿を送ると、直ちにストックホルム大学の日本学科でスウェーデン語に翻訳し両国の交流に役立てるので私は大変嬉しいのである。

スウェーデンと私との交流はかれこれ30年になるが、

文教大学名誉教授 菊池幸子

Prof. Emeritus of Bunkyo University Sachiko Kikuchi

これを4期にわけて考えてみることにする。(1)福祉学習とスウェーデンへの留学、(2)ストックホルム滞在とストックホルム大学就任の時期、(3)帰国後のスウェーデンご無沙汰時代。(4)再び親密な交流の現在。スウェーデン社会研究所は、これら4期を通して陰に陽にスウェーデンとの交流を授け、支えてくれたことを明記し、ここに礼申し上げたい。

(1)福祉学習とスウェーデンへの留学

教育社会学を専攻してすでに教授のポストを得ていた

私が、福祉国家スウェーデン視察に出かけたのは1969年の夏であった。日本の民社党の推薦によってスウェーデン社民党に歓待され、この国で『福祉社会』を本格的に学ぼうと決心したのである。留学となればスウェーデン語が必要となる。スウェーデン語に参加したのがスウェーデン社会研究所と私との関係の始まりであった。大学の講義の合間に通う慌しい学習であったが、現在の私のスウェーデン語の基礎を、スウェーデン社会研究所で習得したのである。当時の講師は石渡先生、今は亡きニル・オヴ・ペテション先生など懐かしく思い出される。1年間の語学研修の後、ストックホルム大学の国際大学院では社会福祉を専攻し、本格的にスウェーデン福祉を学んだ。

(2) ストックホルム滞在とストックホルム大学就任の時期

『日本の学者のなかでは珍しくスウェーデン語をマスターしたから』との理由で、ストックホルム大学の人文学部日本学科で教鞭をとったのは、1975年から77年の3月までであった。当時のスウェーデンでは、福祉国家から福祉社会への移行期というべきか、高福祉高負担への国民の批判も少なからず、社会問題も頻発していた。社会学的に福祉体制の分析をするには好都合とばかり、大学で日本語と日本社会の制度・文化を講義するかたわら、青少年問題や高齢者福祉の現場調査に明け暮れたのである。また着任早々、日本大使館の指示によって作った日本人学校（国際補修学校）の初代校長も勤めたが、すでに20周年を迎えたとの報告を受けて、私が、スウェーデンに残した足跡として嬉しい思い出となっている。

この間スウェーデン社会研究所との交流は、文通によ

る情報交換のほかにはストックホルムの私宅をご訪問頂いたことである。故西村理事長、高須先生、内藤先生、河野さんたちとのストックホルムでの歓談は懐かしい思い出である。とくに内藤先生はかなり長期滞在をなさったので、ご家族ともども親交を深めることが出来、いまに続いているのは嬉しい。

(3) スウェーデンで無沙汰時代と再び親交のいま

スウェーデンの福祉研究に油ののった私は77年に帰国して、目の回るような多忙な時期を迎えた。当時から日本に押し寄せた高齢化の波への対応が急務となり、高齢者福祉の原稿書き、講演、現地調査に追われた。いっぽう臨時教育審議会をはじめ引き続き政府関係の審議会等に参加しスウェーデン訪問のチャンスも得られず、約10年間のご無沙汰が続いた。しかし第二の故国と決めたスウェーデンへの親近感はずちなく、スウェーデン大使館ないしスウェーデン社会研究所の行事に参加してその文化を吸収していた。

この間『福祉社会はスウェーデンばかりでない』という国内の批判に答えて、オーストラリア、イギリス、アメリカへとフィールドワークを重ね、『世界の高齢者文化—家族・住まい・ケアを通した国際比較』（中央法規出版、1998）となったのである。

スウェーデンと再び交流の深まっている私の、スウェーデン社会研究所に望むのは、時代の流れに逆らわず運営のスタッフは交替しても、いつまでも日瑞交流の不変のシンボルであって欲しいということである。



17世紀の戦艦ヴァーサ号模型贈呈式を見て



17世紀に世界最大最強の船艦として建造されたスウェーデンの木造帆の戦艦ヴァーサ号の20分の1モデルを1人の日本人宮下俊夫氏（泉創建エンジニアリング）が、20年かけ、精密に復元、製作したのがこのほど完成しスウェーデン国王に寄贈した。

6月16日在日スウェーデン大使館において、クムリン・駐日スウェーデン大使に引渡され、同大使館のロビーにそのまま展示し見学に供されることとなった。

ヴァーサ号は悲劇の戦艦として有名で1628年7月に完成、8月に進水しそのまま転覆、沈没した。そして、333年後に上げられその後30年かけ考古学者や造船技術者によって遺留品や船体を原型のまま再生、復元、保存することに成功した。水中考古学の成果だ。水ぶくれした樫の木の船体から水抜きしつつポリエチレングリコールを17年かけて除々にしみこませる等の作業を歳月と努力と知力を傾け復元させ、巨大な船体をほぼ昔のまま（船体の長さ47.5m幅、11.7m、10枚帆、1,210tのマスト3本）ストックホルム市内に展示されている。

沈没の原因は、建造を命じたアドルフ国王によって究明されようとしたが、遂に今日でも原因不明謎となっている。300年以上も海底にあって原型や船内の美術品、生活用品も保存されたのは、バルト海が塩分少なく、ふなくい虫がい



ない、水温が低い、沈没が戦闘でも難波でもなく静かに30数メートルの海底に沈んだことが理由と思われる。

在日スウェーデン大使館又はストックホルムへ行ってこの船の謎を考えてみては如何。

スウェーデンアドルフ王は沈んだお陰で未来に素晴らしい物を遺された。（池田富士太記・Fujita Ikeda）

ヴァーサ号模型とクムリン・駐日スウェーデン大使。後方右端が寄贈者・宮下俊夫氏

法人会員情報

◆東京FM

TFMが続ける“地球環境問題を意識し自覚させる”番組は、EARTH CONSCIOUS「地球を愛し、感じるところ」というスローガンをかかげ、1990年にスタートした。目的は20代を核としてオピニオンを形成し、社会にメッセージを発信することで、感動と共感のネットワークを築くことにある。この活動を始めてから11年になるが、毎年4月22日のアースデーには、世界同時中継「We Love Music, We Love the Earth」が放送され、今年もJFNの全国36のFM局をはじめ、海外22ヶ国、計322局が参加した。

同時に、毎月一回、幸田シャーマンをコメンテーターに特別番組を放送し、WEBに「Voice of EARTH CONSCIOUS」(URL <http://www.tfm.co.jp/EC/>) が開設されている。番組あてに、皆様からのご意見をお寄せください。

最近のテーマは、「東京の星空」(7/7)、「沖縄・石垣島白保サンゴ礁」(6/2)、「東京の山、東京の海」(5/5)、「自転車に乗ろう」(4/7)、「春を告げる虫たち」(3/3) など。放送時間は、毎月第一金曜、5時から。TOKYO FM 80.0 MHz。

◆東海大学平和戦略国際研究所

1986年創設。ストックホルム国際平和研究所と協力して、SIPRI年鑑を出版してきたが、最近では、世界のさまざまな紛争問題を対象とし、外部の人材も招いて研究会を行い、その成果としての出版活動を続けている。

組織は、大学から離れた法人直轄の機関で、専任研究員は10名。ともに東海大学で教鞭をとり、またはとっていた者で、外務大臣や外務政務次官経験者、紛争地域でNGO活動を実践して居るもの、マスコミ、言論界出身者など多才である。

◆東海大学北欧研究会

同一学校法人傘下の東海大学・北歐文学科(2001年より北歐学科に改組)、北海道東海大学・北方圏文化学科(1999年新設)の教員を軸に、広く工学から政治経済、医学、福祉、看護、国際交流などの分野の両大学教職員有志による研究会。

6月3日(土)。札幌コンサートホールkitaraの会議室において、北海道東海大学工学部上瀧實教授による「北歐の大学における情報教育」についての講演を聞き、パイプオルガンと弦楽カルテットの演奏を聴く。

6月28日(水)。東海大学湘南校舎において、ストックホルム大学の鈴木賢志教授による「スウェーデン経済一最近の動向」、北海道東海大学川崎一彦教授の「北歐における産業クラスターと環境対策」の講演が行われた。(JISSとの共催)

「ロッタちゃん」と「いじこんしゃ」の 主演女優グレテ・ハヴネショルドちゃん来日!

text by matsumoto • photo by naka.jima

本作のキャンペーンのため、ロッタちゃんを演じたグレテ・ハヴネショルド(現在14歳)ちゃんが、スウェーデンより来日しました。6月24日には、恵比寿ガーデンシネマにて舞台挨拶が行われ、会場には、沢山のロッタファンが集まりました。グレテちゃんは、初めての日本への長旅のお疲れも見せずに、既にプロとしての風格さえ感じられました。

グレテちゃんの最も思い出深いシーンは、いつも子供扱いされ早く大人になりたいロッタちゃんが夕立の雨の中、牛の糞の上で叫ぶシーン。この撮影日はとても寒く夏服のグレテちゃん以外、他のスタッフは全て厚着をしていたそうです。また、撮影当時は5歳だったということもあり、遊ぶ時間がなくておねた事もあったそうです。ロッタちゃんといつも行動を共にしているバムセ(「ヘンテコなブタ」という兄のヨナスに、ロッタちゃんは「バムセはぶたくまなの!」という可愛いシーンがあります)

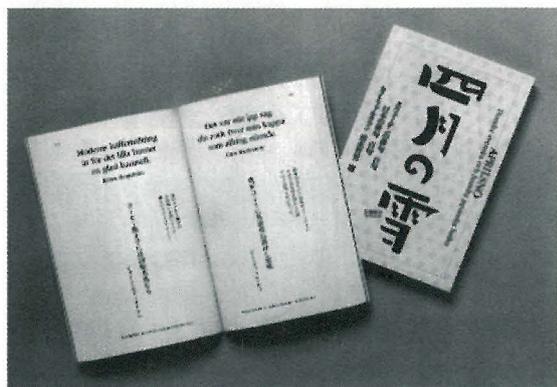
については、撮影時に3つ作ったうちの1つを今でも家で大事に保管しているとの事。ロッタちゃんの愛らしいイメージそのもののグレテちゃんは、今、乗馬に夢中で、スウェーデンに帰って愛馬に会う事を楽しみにしていました。SFXが盛んな映画界の中では、この作品は物足りないかも知れません。しかし、見終わった後に「のほほん」と木漏れ日の様な温かさが感じられる作品であり、それはスウェーデンだからこそ、だとも思います。



【写真上】スウェーデンでは、子供映画はほとんど子供しか見ないので、集まった10~40代の観客にグレテちゃんは少し驚き。グレテちゃんのお母さん(右横)も、スウェーデンから同行し、撮影中のエピソードを語る
【写真右】映画の中でも常に一緒だったお気に入りのぬいぐるみ・バムセと共に。14歳のグレテ・ハヴネショルドちゃん



Books



「四月の雪 APRILSNÖースウェーデンの俳句 百句 日本の俳句 百句」

カイ・ファルクマン、清水哲男 選
 小B6判、244頁／2,520円(送料・税込)／
 2000年5月29日 日本・スウェーデン同時発売
 ■ご注文・ご購入に関するお問合せ (株)トランスアート市谷分室 Tel:03-3266-4698Fax:03-3266-2499
 ■内容に関するお問合せ 「本とコンピュータ」編集室 Tel:03-3266-4270

スウェーデン、日本から選り抜きの感性を集めた俳句アンソロジー。厳選された二百句の俳句が、それぞれの国の心、風土をつたえる文化の架け橋となりました。

「北欧音楽入門」

大東省三著／四六判、248頁
 ／1,700円(税別)／
 2000年6月10日発売
 北欧音楽に魅せられて50余年、この分野で随一の著者が、北欧の作曲家、演奏家、そして愛する北欧の風土について縦横に語る。



事務局より

平成12年度臨時総会開催のご案内

平成12年9月28日(木)午後2時より、霞ヶ関ビル33階において、臨時総会を開催致します。

ご多用の折とは思いますが、万障お繰り合わせの上、会員の皆様にはご出席いただきますようお願い申し上げます。

The Japan Institute of Scandinavian Studies



(社)スウェーデン社会研究所 事務局(松元・Matsumoto)
 〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1 (株)科学新聞社内5F
 C/O Kagakushinbunsha, 1-8-1 Hamamatsucho, Minato-ku, Tokyo105-0013 Japan
 TEL:03-5776-1835 FAX:03-5776-1836 E-mail:jiss99@tkg.att.ne.jp
 URL http://www.sci-news.co.jp/sweden/
 月曜日～土曜日(水、日、祭日休) 10:30～17:30 Mon to Sat (Wed,Sun,Holiday close)

JISS INFORMATION

講習会

2000年10月5日～
 2001年2月3日(土)

秋学期(102回目)
 スウェーデン語講座開講

また、「スウェーデン・トラベルガイド」と題した特別講座も開講予定。全講座の詳細は、事務局までお問合せ下さい。

JISS EVENT SCHEDULE

講演会

11月10日(金)

大使館でのレクチャーシリーズVol.2!

「情報は北から」

ー情報先進国・北欧に学ぶ!ー

いま、IT(情報技術・Information Technology)という用語をTVや新聞・雑誌で目にしない日はないでしょう。このITは社会の変革をもたらす魔法の杖といえるのではないのでしょうか?なぜ北欧で情報化が進んだのか、また、日本にとって学ぶべきことが多々あると思います。北欧の情報化の進展状況を日本と比較してお話して頂く絶好の機会です。

日時:11月10日(金) 18:00～20:30

(コーヒープレイクあり)

場所:スウェーデン大使館オーデトリウム

講師:上瀧實氏(北海道東海大学情報システム学科教授)

参加費:会員無料/非会員2,500円

定員:先着100名まで

11月18日(土)

「スウェーデン・エコロジカルな暮らし」

ー自分らしく生きるためにー

スウェーデンは日本より色々な面において優れていると言っても過言ではありません。しかし、私達はそんなスウェーデンを美化し過ぎている事も否めません。93年よりスウェーデン南部に在住のアキコ・フリッド氏を講師にお迎えして、環境問題、遺伝子組み換え食品、男女平等、そして避妊用ピルに関するトピックを中心に、スウェーデンの“真”の現状をお話し頂きます。日本、スウェーデンにと拘らず、地球に住む人間としての生きるヒントをご紹介します。

日時:11月18日(土) 13:00～15:30

(コーヒープレイクあり)

場所:JISS事務局内イベントルーム

講師:アキコ・フリッド氏

参加費:会員無料/非会員500円

定員:先着50名まで

上記とも皆様のご参加をお待ちしております